

英詩における口語（speech）の台頭とその超克

—— 詩的言語のイデオロギーとホプキンズ*

桂 山 康 司

詩とは何かという問いかけに対してそれぞれの時代に、さらには個人によって、特有のものの見方があり、それをここではイデオロギーと呼んでいます。ことに詩の言語にはどのような特徴があるのか、またあらねばならぬのか、について、イギリス詩の歴史における口語の持つ特別な位置づけに注目し、特に、ホプキンズ（Gerard Manley Hopkins）の詩は、どのような立場に立つものなのかを明らかにし、更には、詩の本質に「口語的」という言語上の特質がどのように関わっているのかを検討するのが本稿の目的です。

さて、古来、詩はミューズの賜物とされ、その考え方は根強く、遅くとも17世紀の英国にはまだ生きていたと思われます。もちろんそれとは対照的な、近代における人間中心主義的な発想による捉え方、つまり詩人の創意工夫、努力によるという考え方がこれまた古来よりあることは言うまでもありません。17世紀の詩壇においてそれらが拮抗し、さらには逆転する兆しが見られるの

* 本論考は、日本ホプキンズ協会第33回連絡総会（2005年5月21日、於：上智大学）において「口語（speech）の台頭とその超克 —— 詩的言語のイデオロギーとホプキンズ」と題しておこなった研究発表に、加筆・修正を施したものである。

は、詩のなかでも最も尊ばれたジャンルである叙事詩において、コンヴェンションのひとつであるインヴォケイション（詩神への祈願）をなお維持する詩が書かれる一方で、その代表例であるミルトン（John Milton）の『楽園の喪失（*Paradise Lost*）』におけるインヴォケイションの使用に対して数々の批評家からそれが時代遅れであると指摘があったことから窺い知ることができます¹。インヴォケイションは今や単なるコンヴェンションにされて、詩（poetry）は、霊的に授けられるのではなく、詩人の努力により磨きかけられるものとみなされ、また、さらに出版文化の興隆がそれに追い討ちをかけて、詩は今や批評の対象となって（個人の努力によるものならその製作技術が問題となり、その点について批評が盛んに行われることになります）、そしてそのことからさらには詩の媒介である言語そのものに対する関心もまた高まることとなり、後に、サミュエル・ジョンソン（Samuel Johnson）による辞書の編纂（1755 出版）が時代の要請に応えて、英語という言語を理性の時代にふさわしい姿に整えることに大いに貢献することとなります。ジョンソンには、このように、ものを書くことを覚えて（つまりリテラシーを獲得して）、辞書の利用を通じて言語表現を規範化することは、話す際の言葉、いわゆる口語（speech）をも改善することになるとの信念があったと思われます²。

しかしながら、その考えに真っ向から反対する意見を持つ人物がいました。トマス・シェリダン（Thomas Sheridan）です。劇作家リチャード・プリンズリー・シェリダン（Richard Brinsley Sheridan）の父親で、俳優であった彼には職業柄か、ジョンソンとは正反対の信念がありました³。つまり、彼は口語に

1 H. T. Swedenberg, Jr., *The Theory of the Epic in England 1650–1800* (1944; rep. New York: Russell & Russell, 1972), 44–5.

2 Nicholas Hudson, *Writing and European Thought 1600–1830* (Cambridge Univ. Press, 1994), 103. ラテン語に対して自国語のことを vulgar tongue (speech) といい、字義的には俗衆の言葉をさすことを思い起こされたい。

3 Nicholas Hudson, 104.

こそ言語の本質があるとみて、書き言葉を話し言葉の下位においたのです。

All this arises from a mistake, which men naturally enough fall into, who judge of language only in its written state; that sentences are wholly composed of words and stops, because there are no other visible marks offered to the eye; but the man who considers language in its primary and noblest state, as offered to the ear, will find that the very life and soul of speech, consists in what is utterly unnoticed in writing, in accent and emphasis: And as the man who attempts to pronounce words, without observation of accent, really does not utter words, but syllables; so the man who attempts to pronounce sentences, without emphasis, really does not utter sentences, but words. So that in speech, words are the body; pauses and stops give it shape and form, and distinguish the several parts of the body; but accent and emphasis, are the life, blood, and soul, which put it in motion, and give it power to act.⁴

「以上のことはすべて、ある誤った考えから生じたものである。それは、言語というものを書かれた状態においてしか判断をしない人ならば、当然のごとく陥ってしまうもので、つまり、文章というものはすべて、語と句読点から成るというもので、なぜなら外目にはそれ以外、目に見える特徴はないからである。しかし、言語を始原のもっとも高貴な状態において考察する、つまり、耳に供されたものとして見る者には、言葉 (speech) の肝腎要の中心は、書面では全く気づかれないもの、つまり、アクセントや強調にこそ存するとわかるのである。だから、語をアクセントに注意を払わず発音しようと試みる者は、実際は語を発しているのではなく、それは音節でしかないように、文を、強調を付けずに発音しようとする者は、実際は文を話しているのではなく、それは語にとどまるのである。したがって、言葉 (speech) において、語は肉体であり、間や休止はそれに形や姿を与え、肉体の各々の部位の区別立てをするが、アクセントと強調は、命、血、魂と言ってよく、肉体を動かし、それに活動する力を付与するものなのである。」

この言語認識の違いは、詩そのものに対する認識の変化にとって重要な意味を持つことは言うまでもありません。ジョンソンは、あくまでも古典的、ハイ・カルチャー的な文学趣味、創作観を固持していたのに対し、それとは違って、

4 Thomas Sheridan, *A course of lectures on elocution, together with two dissertations on language* (London, 1762), 71.

ルネサンス的な古典尊重の文学観にとらわれない人々が声を挙げ始めたのです。この感覚がワーズワス (William Wordsworth)、コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge) による 1798 年の *Lyrical Ballads* の出版、1800 年の第二版に付されたワーズワスによる序文に見られる創作観を生み出す背景の一部となっていたことは十分に考えられます。そしてそれに一定の説得力を与えたのが、身近な口語のもつ、それ固有の表現力の発見でありました。そしてそのことは、詩が靈感によって与えられるとした、いわば詩は人智を超えた、ありがたいものであるとして崇め奉るという感覚（そこで、詩人は神がかり的狂人と同一視されます）をほとんど払拭すると同時に、詩が一部の教養あるものに占有される状況から個人の言語感覚、文学的才能によるものだということにまで、ある程度、開かれてきたことを意味します。口語の発見は、詩を大衆に開放する、民主化の原動力となったのです。そして、それが達成される過程である、来るべき 19 世紀の詩の歴史は、詩そのものが文学の主要な位置から没落し、その首座を小説に譲る過程に重なることは、まさに皮肉なことといわなければなりません。大衆は貴族趣味から完全に脱却できずにいる詩の民主化を待たず、より身近な散文小説へと一気に突き進んだのです。

さて、今度はその肝心の 19 世紀を飛び越えて、後の 20 世紀において、口語と詩との関係がどのように捉えられていたかを見てみたいと思います。T. S. エリオット (T. S. Eliot) がミルトンを詩の実作者の立場から非難し、日常語からの極端な乖離を理由に文学の首座から放逐しようとしたことは周知の事実ですが、第二次大戦後、それを説明し自らの立場を弁明する際に、この口語と詩との繋がりを強調し利用したのは、詩のイデオロギーということを考察する上で注目してよい、興味深い事実です。

I have on several occasions suggested, that the important changes in the idiom of English verse which are represented by the names of Dryden and Wordsworth, may be characterized as *successful attempts to escape from a poetic idiom which had ceased to have a relation to contemporary speech. This is the sense of Wordsworth's Prefaces.* By

the beginning of the present century another revolution in idiom — and such revolutions bring with them an alteration of metric, a new appeal to the ear — was due. It inevitably happens that the young poets engaged in such a revolution will exalt the metrics of those poets of the past who offer them example and stimulation, and cry down the metrics of poets who do not stand for the qualities which they are zealous to realize. This is not only inevitable, it is right.

.....

But Milton does, as I have said, represent poetry at the extreme limit from prose; and it was *one of our tenets* that verse should have the virtues of prose, that diction should become assimilated to *cultivated contemporary speech*, before aspiring to the elevation of poetry.

.....

If the poetry of the rest of this century takes the line of development which seems to me, reviewing the progress of poetry through the last three centuries, the right course, it will discover new and more elaborate patterns of a diction now established. In this search it might have much to learn from Milton's extended verse structure; it might also *avoid the danger of a servitude to colloquial speech and to current jargon*.⁵ (Italics mine.)

ここでエリオットは大変持って回った言い方でワーズワスの行った詩の言語における変革を表現しています。「同時代の言葉 (contemporary speech) と繋がりをもたなくなった、詩に特有の言い回しから免れることに成功した試み」とはいわゆる poetic diction を用いずに詩作することを指しているのですが、この際に、詩の言語が口語に根ざさなければならないのだと、積極的に口語の魅力方を肯定的に認める言い方をしていない点にご注意ください。あとで「話し言葉や今はやりの特殊な言い回しに隷属する危険 (the danger of a servitude to colloquial speech and to current jargon)」に言及し、これを避ける (avoid) ことの効用を説くエリオットは、先に言及した口語の優位を積極的に説くトマ

5 "Milton II (1947)", rep. in *Selected Prose of T. S. Eliot*, ed. Frank Kermode (1975), 272-3.

ス・シェリダンとはこの点でも大きく異なっていることは目を引きます。エリオットは、口語を積極的に評価する場合も、それが詩一般に通じてそう言うのではなく、われわれの信条のひとつ (one of our tenets) にそれがあるという慎重な言い方をしている点、またその場合でも、詩の用語は洗練された現代の口語 (cultivated contemporary speech) に同化していなければならない、というふうに、何食わぬ顔で「洗練された (cultivated)」という制限をつけているなど、エリオットは口語の持つ魅力を認める場合でもきわめて慎重な物言いに終始していることは注目に値します。ここで用いられている“cultivated”という言葉は象徴的で、エリオットは 20 世紀半ばにしてなお貴族主義的文学観の持ち主であり、下卑た連中の言葉遣いなどそのままでは何の足しにもならぬというハイ・ブラウな考えから一歩も引かぬ強固な保守主義者であったというわけです。

さて、時代的にはワーズワス、エリオットに挟まれ、その間に位置するホプキンスはこの詩と口語との関係についてどのように考えていたのでしょうか。

So also I cut myself off from the use of *ere, o'er, wellnigh, what time, say not* (for *do not say*), because, though dignified, they neither belong to nor ever cd. arise from, or be the elevation of, ordinary modern speech. For it seems to me that the poetical language of an age shd. be the current language heightened, to any degree heightened and unlike itself, but not (I mean normally: passing freaks and graces are another thing) an obsolete one. This is Shakespeare's and Milton's practice and the want of it will be fatal to Tennyson's Idylls and plays, to Swinburne, and perhaps to Morris.⁶

「そこで私は“ere”、“o'er”、“wellnigh”、“what time”、“(do not say)”の言い換えとしては“say not”を使用することからは手を切ったのです。なぜなら、これらの言い方は、莊重ではありますが、今のふつうの言葉 (ordinary modern speech) でもなければ、それをどういじくっても出てこないものであって、またそれを高め

6 *The Letters of Gerard Manley Hopkins to Robert Bridges*, ed. Claude Collier Abbott (Oxford Univ. Press, 1955²), 89.

た結果というわけでもないからです。というのも、私には、どの時代であれ、詩の言葉は今使われている言葉 (current language) を高めたものでなければならぬと思われるからで、たとえ、どんなにであれ高められた結果、今使われている言葉とは似ても似つかぬものとなったとしても、断じて廃語であってはならないのです (とはいえ私の言うのは一般論での話で、一時のきまぐれや美しさを備えるのに用いるのは話が別です)。シェイクスピアもミルトンもこれを行うことを常としたのであり、このことを行っていないことがテニソンの牧歌や芝居、スウィンバーン、そして恐らくモリスにとっても、致命的となっているのでしょう。」

ここでホプキンズは、“obsolete” な表現は詩では用いてはならないとして、詩の用語は “current language heightened” であるべきだと主張しています。この言い回しは直前にある “elevation of ordinary modern speech” の言い換えと考えられるので “current” は “ordinary modern” の意味を受けており、“heightened” は “elevation” の語義を受けていると考えられます。“speech” や “current” という言葉に、colloquial の意味を殊更に読み込むことは可能ですが、文語に対する口語というシェリダンが用いた対立関係におけるものというよりは、現在通用しているということに力点がある言い方であると取る方が私には自然であると思われます。“obsolete” に相対するものとして「現在普通に用いられている」ということです。その意味で、ここでの詩的言語に対するホプキンズの理解は、エリオットに近いものであると言えるでしょう。つまり、積極的に口語がいいと言っているわけではないのです。

シェリダンには明らかに口語を文語に優越させようという意図が表明されており、それには political な背景があると感じられました。つまり、古典の修得に基づいた文学などの written language が示す貴族的な学識や上流階級的な知のあり方を literacy に代表させ、それに対して、シェリダン自身が “living voice” と呼ぶところの自然な口語のもつ生き生きとした力を対比させて、演劇の舞台に端的にみられる庶民の自然な発話の力をむしろ称揚しようとしたのです。その意味で、シェリダンの発言は十分に ideological な色彩の強い意見と言わなければなりません。「詩とは何か」などという悠長な、趣味人的、有閑

階級的問いかけではないのです。ワーズワスは、その点で、若い頃こそフランスかぶれの考えが時折顔を覗かせましたが、この種の発言には慎重でした。しかし、それでも、詩の言語を市井の人間の言葉においても達成しようとするとは、当時の風潮にあっては十分に政治的な試みと目されたはずです。

ここで思い起こされるのが、アーノルド (Matthew Arnold) が *Culture and Anarchy* の中で取り上げたためによく知られることになった、19 世紀急進主義者の教養 (culture) に対する見解です。つまり、culture というものは the two dead languages of Latin and Greek に対する生半可な知識 (smattering) に過ぎないというものです⁷。ここでラテン語やギリシャ語は殊更に “dead” と形容され、それに対する “living voice” としての口語のもつ力をいわばシェリダンは強調していたのです。アーノルドはもちろんこの一般的風潮に対して culture の本義を踏まえて古典的教養観を擁護したのですが、エリオットはまさにその伝統を受け継ぐもので、“living voice” ではなく “cultivated contemporary speech” に詩はよるべきことを主張したのです。言ってみれば、エリオットはここで、恐らく十分承知の上で ideological な発言をしているのだと思われます。なるほど、確かに、エリオットは古典の伝統に連なることを希求した詩人でした。

口語と詩との関係について、ホプキンズとエリオットの見解（実践となれば話はかわります）は、基本的に同じラインに沿うものであったと思われますが、その場合、エリオットが “cultivated” と表現したものをホプキンズは “heightened” と言い表したと考えられます。しかし、ホプキンズの用語法は、エリオットに比べて、ideological な色合いが希薄である点は見逃せません。もちろん “high” という観念には ideology が入り込みやすいのですが、ここではそうではないと思われます。このことを考えるためにも、エリオットとホプキンズ

7 Matthew Arnold, *Culture and Anarchy*, ed. R. H. Super (The Complete Prose Works of Matthew Arnold, Vol. V), 87.

にあって、対極の見解を有する事例を取り上げたいと思います。それは、詩人ミルトンに対する評価です。

口語、更には詩的言語一般についても、お互いに遠からざる見解を有していたと思われる二人が、一方は強くミルトンを嫌い、他方、ホプキンズは、上記の引用にもある通り、シェイクスピア (William Shakespeare) と並んで高くミルトンを評価していたという相違はどこから生じたものなのでしょう。この問いに対する答のヒントは、詩人の社会的機能に対する両者の見解にあると思われます。エリオットは、先に引用した、若かりし頃のミルトン批判への弁明を行った評論においても垣間見ることができるよう、社会との関係を十分に意識した上で発言し、行動をする人物でした。つまり、社会や時代の要請に敏感な詩人でした。しかしそれは同時にある種のポーズをとることを詩人に要求することにもなります。エリオットは詩を漫然と自己満足のために書いていればいいというのではなく、時代をリードする知識人としての自覚があったのです。それに対して、ホプキンズにあっては、そのような社会に対する見せかけは希薄でした。よく指摘される通り、ホプキンズの詩は神との対話に他ならず、社会との対話である必要はありませんでした。ホプキンズが同時代の社会に対して強い関心をもたなかったと言っているわけではありません。エリオットのような“leading poet”に求められる社会的ポーズとは無縁であったということです。社会に対する、この異なる姿勢がミルトン評価を対極のものとしたのです。

エリオットのミルトンに対する理解はホプキンズに劣らず優れたものであったにもかかわらず、エリオットはそれを立場上認めるわけにはいかなかったのです。これは作家の「誠実さ (sincerity)」と関わる問題ですが、だからといって、political な振る舞いをするのが直ちに insincere となるわけではありませんし、その意味でエリオットを批判するつもりもありません。ただ、筆者が、ホプキンズとミルトンに心から共感を覚えるのは、それは、この二人の詩人が、エリオットとは違い、飽くまでも自分の信念に忠実であったこと

に起因するものであり、その信念が、表現上際立って個性的な独自性 (idiosyncrasy) として高め (heighten) られ、立ち現われてくるまさにその瞬間を、詩的言語表現として高く評価したいと考えているからです。